単独選抜制度移行による
旧総合選抜高校間格差の要因

松　森　武　嗣

はじめに

1993年２月に文部省通知「高等学校の入学者選抜について」が出されて以降、公立高校入試での総合選抜制度[1]を廃止し、単独選抜制度へ移行する自治体が増え、１府１県の一部にまで減少している。高校制度改革の嚆矢としては、1971年に中央教育審議会から答申された「第三の教育改革」[2]まで遡ることができるが、実態としては、1990年代以降の15歳人口の急減と高校再編化を背景に、高校教育の多様化の一環として実現化されている。

広義の総合選抜制度、特に長崎県内の３地区で実施されていた総合選抜制度は、通学の便などに配慮しつつも、総合選抜高校間格差を極力なくすことを理念とし、成績均等配分――合格者の一定の上位・下位を均等配分――の基本原則のもとにあった。年度により高等教育進学・文化・スポーツ実績に差がでたが、県教育委員会、学区内居住の保護者や生徒の意識のなかでは、高校間格差はないことが通念であったし、長崎県での総合選抜制度の実効性は大きかった、と語られている。

本稿では、長崎地区において、一時期単独選抜制度になったものの、総合選抜制度――1951～57年は合同選抜、61年以降は総合選抜――が2003年単独選抜制度になったことにより、旧総合選抜高校間の格差化、その要因という問題の解明を追究する。裏を返せば、総合選抜制度が元来はらんでいた、制度内矛盾や限界の根拠――自由と平等の価値相克――を明らかにすることにも通じる。

１．分析視角と調査概要

１．１．既存の知見

高校間格差の研究では、「普商工農」というタイプ・ランク（学校階層）が、進路を規制するトラッキング・システムとしての選抜・配分機能を果たしている（橋爪1976b：273）という制度的構造と、それらの過程に成績原理や所得原理（潮木1975：84－85)、ないしは社会階層（秦1995）の作用があることが指摘され、特に学力上位層の動向（橋爪1976a）が、インプット（単独選抜入試）→アウトプット（合格実績）→インプット（層別入試）を規定するとされた。この格差論は、ベビーブーム世代の入学期を境に拡大・深化してきた高校教育のユニバーサル化の脈絡上にあり、高校ランクに応じた生徒文化，進路選択が枠づけられるメカニズムを示すと同時に、その問題点も指摘した。それゆえ、1952年と1974年の前後に多くの導入がみられた総合選抜制度は、上級学校への進学を希望する高校生が将来の有為な人材となることを期待する意味において、その都道府県の一部学区，都市部の新設普通科高校の新エリート校の育成のためであり、選抜学区内の他の高校との格差を生じさせる逆機能（篠原2002：３）の性格を帯びていたが、理

念的には、制度内普通科の教育における機会均等という平等理念の実現を目指して、制度内普通科高校における格差形成とそれによる格差細分化に歯止めをかけるものとして期待された。だが、総合選抜制度でさえ、格差化は不可避なものとして、例えば清水義弘の言葉を引用した「学校差は、同一の物的人的条件のもとにおいても発生する」（田村1959：27）との認識に導かれることになった。

このような、格差は不可避との格差論のなかで、1990年代以降、15歳人口の急減と高校再編化を背景に高校教育の多様化が推進され、また高等教育進学をめぐる競争緩和という制度的環境の変容による進学率の上昇があいまって、「トラッキングの弛緩」仮説が導かれた。つまり、多様化・個性化を理念とする教育改革の進展による高校の特色化が進み、それにより偏差値輪切り進学が変化して、学校・生徒文化間の差異が縮小するとの仮説である。そこには、生徒の学習や行動の組織化がなされるプロセス（スループット）の、独自の教育効果を生み出す可能性への期待も含まれていた。結果的には、高等教育機会の量的開放性が高まっても、成績原理と所得原理は続いて「トラッキングの弛緩」は必ずしも認められないが、四大進学か否かの学校ランクにおいては二極分化がみえるとして、社会階層間格差と連結したトラック構造の再編成が唱えられた（耳塚2000：65－82）。

このように、既存の高校間格差研究の多くが学校階層の差異に基づいて、生徒の学力や社会的背景から卒業後の進路までの差異を明らかにしてきたことに対し、本稿は、2003年から単独選抜制度になった長崎地区普通科の進学校（旧総合選抜校）における高校間格差に焦点をあてている。つまり、長崎県の総合選抜制度は、総合選抜校間格差を極力なくすこと（平等）を理念とした制度により、通学の便などに配慮しつつも、成績均等配分の基本原則のもとにあるインプットであり、かつ学校規模や教員配置などが同程度の物的人的条件のもとにあったことから、実質的に高校間格差はなかった。それゆえ、同一階層の総合選抜校間に、制度変更によって果たして格差がみられるのかどうかである。格差化の現象があるとすれば、公立高志向が強い長崎地区での単独選抜制度は格差細分化を予想させ、地区全体における瓢箪型構造が、徳利型構造ひいては菱型構造へと変容し、高校間の序列化が明確になっていく可能性がある。総合選抜制度の制度内矛盾や限界を克服してきた、全国的にも稀な長崎県が単独選抜制度になったことを契機に、新制度によるアウトプットが不明な期間における格差形成の要因を捉えることは、既存の格差研究の成果であった、アウトプットに依存したインプット（層別入試）という循環図式を成立させる嚆矢としてのインプット（単独選抜入試）のメカニズムを探ることを可能とし、また格差論それ自体のコアに迫る上でも意義がある。

１．２．分析の視角

学校階層の差異に基づく格差研究を前提にして、制度変更によるアウトプットが不明な同一階層における格差問題を取り上げ、格差研究の進展を目指す。2008年までの合格実績の資料だけでは流動的だが[(3)]、新制度第１期生の2003年と2005年の２時点調査の結果[(4)]を中心に分析する。つまり、①格差の発生か否か、②格差があれば、旧制度のアウトプットがリセットされた第１期生の、その担い手は誰か、③担い手の高校進学の理由は何か、④担い手の高校選択の理由は何かである。作業仮説的には、新制度によるアウトプットが不明な第１期生による高校間格差は、生徒が学業成績（状況）に条件づけられながら、進学理由（目的）を抱きつつ、それと連関する望ましい学校文化（理念・規範）に規定された志願理由（手段）の差異から発生する。それゆえ、格差の動因（②と③）や、入学試験出願関連のインプット（④）における格差の背景から探る。

１．３．調査の概要と変数

分析に供した調査の概要〔表１〕と変数の定義〔表２〕を説明する。調査に強制力がなく、協力を得るために全クラス対象を避けた。Ａ・Ｂ高各360名，Ｃ・Ｄ・Ｅ高各320名の定員に応じて事前に相談し、合意できたクラス数に質問紙を郵送した。中学校も同様である。

2003年調査で高１生（新制度１期生）対象の「単独選抜制度評価」「志願変更の理由」「志願理由」の各カテゴリー変数を分析用に加工した。

表１　調査の概要

調査年	対　象　者	方法	人　数（回収率）
2003年	旧総合選抜５校の新入生 （Ａ高５，Ｂ高４，Ｃ・Ｄ・Ｅ各高３クラス）	質問紙 郵　送	18クラス720名（100%）
2005年	旧総合選抜地区中学校11校		40クラス1372名（89%）

表２　変数の定義

調査年	変　数		変数の値
2003年	単独選抜制度評価		悪いこと＝－2, どちらかと言えば悪いこと＝－1, どちらとも言えない=0, どちらかと言えば良いこと＝1, 良いこと＝２
	志願変更の理由	成績上昇	いいえ＝1, はい＝２
		成績下降	
		進学したい高校	
		進学したい学科・コース	
		友達と一緒	
		近親者と同じ	
		先生の勧め	
		その他	
	志願理由	高い進学率	いいえ＝1, はい＝２
		希望職業可能性	
		個性の伸長	
		カリキュラム	
		校風が好き	
		伝統	
		成績相応	
		通学の便	
		友達と一緒	
		近親者と同じ	
		その他	

2. 総合選抜制度から単独選抜制度へ

２．１．旧総合選抜校の概要

1948年長崎地区において、旧制中学校・高等女学校の４校が新制高校２校――両校は同質の高校を目指され、生徒の配分は居住地で、教職員のそれは年齢、給与、性別、教科などを均等にした２組の名簿を抽選で――に統廃合され、1950年単独選抜入試が始まった。だが、原爆被害の差異により、成績上位者の志願に偏りがあったため、翌年合同選抜制度に変更された。被災回復の兆しから1958年単独選抜制度に戻ったが、1961年中学卒人口の急増による普通科新設校の誕生と同時に総合選抜制度となり、以後普通科新設校は組み込まれて５校で実施されていた。

1948年Ａ・Ｅ高、61年Ｄ高、64年Ｃ高、79年Ｂ高は誕生した。Ａ・Ｅ高は兄弟校――バンカラなＡ高、ハイカラなＥ高――で、早慶戦に倣い野球対抗戦があった。Ｄ・Ｃ高は15歳人口急増期に新設され、Ｂ高は郊外ニュータウン化の地にある。校訓を、Ａ高は自律、Ｅ高はないが、「梅は梅，桜は桜」が語り継がれ、Ｄ高は気魄と情熱、校是を「学習と部活動の両立」、Ｃ高は教育方針兼生徒の理想像を六綱、生徒の心の在り方を三領で掲げ、校是を「両道顕揚」、Ｂ高は二綱（自学・創造）三領（やさしく・きびしく・たくましく）である。Ｄ高の初代・第３代校長はＣ高の第２代校長を、Ｃ高の初代校長はＤ高の第４代校長を歴任し、両校は校是も基本的に同じで、草創期は同質的であった。

長崎県では公立高志向が顕著で、2005年中３生調査でもその６割を旧総合選抜校が占める〔表３〕ため、1975年に誕生し、九州圏内から生徒が集まる、合格実績で全国レベル（Ｇ社2003年高校入学偏差値73.0）の私立Ｆ中・高以外の私立高は滑り止めとなっている。旧総合選抜校の単独選抜移行期前10年間の合格実績〔表４〕をみると、Ａ高が低位にあるが、誰もが認知するほどの格差はなかった[5]。

表３　公立高希望者の高校タイプ　人数（%）

旧総合選抜校	工業高校	商業高校	総合学科高校	合　計
603(59.8)	172(17.1)	134(13.3)	99(9.8)	1008(100.0)

表４　1988－97年主要大学合格者総数と合格者率

高校	卒業生総数	東京大+京都大	合格者率	九州大	合格者率	長崎大	合格者率
Ａ高	4982	31	0.62	231	4.64	911	18.29
Ｂ高	4534	35	0.77	236	5.21	946	20.86
Ｃ高	4769	30	0.63	248	5.20	908	19.04
Ｄ高	4788	45	0.94	387	8.08	907	18.94
Ｅ高	4865	56	1.15	271	5.57	974	20.02

注）各高校の HP や学校要覧を参考に作成。

２．２．単独選抜制度への移行期

1995年に文・理系コースを各１クラス設置してコース志願制を導入し、また合格者から、中学校長により全総合選抜校志願者の10%程度で、生活態度や生徒会・ボランティア・文化・スポーツ等の活動面で評価に値する者と推薦された（後の「希望校枠」）生徒を、各高校で12名受け入れた。2000年に面接のみで学力検査を課さない、「希望校枠」とコース制を合わせた「一般推薦入試」（各12名の計36名）と「文化・スポーツ特別推薦入試」（５名）が新設された。一般入試では、志願者は３つの選択肢（コース志願、希望校枠志願、総合選抜方式志願）から志願でき、その選考は、全体合格者決定後にコース・希望校枠の入学校を決定し、残りを総合選抜方式とし

表５　1998－2005年主要大学合格者総数と合格者率

高校	卒業生総数	東京大+京都大	合格者率	九州大	合格者率	長崎大	合格者率
Ａ高	3091	38	1.23	136	4.40	593	19.18
Ｂ高	3036	18	0.59	158	5.20	662	21.81
Ｃ高	2888	17	0.59	131	4.54	630	21.81
Ｄ高	2886	21	0.73	109	3.78	580	20.10
Ｅ高	3009	33	1.10	119	3.95	656	21.80

注）各高校の HP や学校要覧を参考に作成。

た。このように、1995年以降部分的な学校選択の自由を認めていた。移行期８年間の合格実績〔表５〕をみると、A 高と D 高にやや変容がみられるが、格差が実感されるほどではなかった。

２．３．単独選抜制度の動向

新制度では、①全日制普通科の通学区域の拡大、②コース制廃止――A 高は存続し、理系コース２クラス――に、③B 高で２クラス理数科新設、④一般推薦定員（10～30%）、⑤傾斜配点導入、⑥コース・理数科志願者の第２志望容認、⑦E 高で１クラス減のような変化があり、２年目以降各高校で④、⑤や⑦の変更がみられた。志願者は①３回（７・10・12月）の進学予定調査結果が公表され、②推薦入試不合格者も一般入試で再度受験可能で、③一般入試出願締切後１回だけ変更可能なため、一般入試競争率に大差はない（較差の最小は H.16年度の0.4倍、最大は H.20年度で0.9倍）が、漸次の較差傾向は、新制度３年間の合格実績〔表６〕の差による傾斜的選抜システムを反映している。

表６　2006－08年主要大学合格者総数と合格者率

高校	卒業生総数	東京大+京都大	合格者率	九州大	合格者率	長崎大	合格者率
A 高	982	18	1.83	99	10.08	230	23.42
B 高	967	5	0.52	39	4.03	250	25.85
C 高	943	2	0.21	29	3.08	200	21.21
D 高	933	3	0.32	18	1.93	150	16.08
E 高	904	7	0.77	48	5.31	177	19.58

注）各高校の HP や学校要覧を参考に作成。

３．格差の動因

上記の合格実績の推移から、A高の「躍進」とC・D高の「凋落」が明らかで、新制度の入学偏差値の推移〔表７〕をみると、拡大再生産の傾向も示している。入学時での学力上位層の動向が、卒業後の合格実績の高さを導いている。

表７　新制度入学偏差値の推移

高校	学科・コース		H.15	順位	H.16	順位	H.17	順位	H.18	順位	H.19	順位
A高	普通科	普通クラス	63	1	60	1	64	1	65	1	60	1
		文系コース	64		60		65		65		60	
		理系コース	68		63		68		68		63	
B高	普通科		62	2	58	2	61	2	61	2	58	2
	理数科		67		60		66		66		60	
C高	普通科		61	4	56	4	60	4	60	4	56	4
D高	普通科		60	5	55	5	58	5	57	5	55	5
E高	普通科		63	3	57	3	61	3	61	3	57	3

注）偏差値は80%の合格基準で，平成15・17・18年度は G 社，平成16・19年度は H 社のものである。

さて、格差の動因は、学力上位層の動向のみで発生するのだろうか。2005年中３生調査協力校の地理的配置のバランスに問題はなく、希望高校別高校進学理由〔表８〕をみると、希望者数で A 高（31.7%）が最も多く、A 高人気の一つの指標となる[(6)]。また D 高は、「上級学校への進学」が他の４校希望者比率のほぼ半分で、「就職有利」の比率が１割高であることから、進学校としての地位低下が予想される。新制度第１期生の合格実績が明らかになる以前から、すでに格差の

兆候を示している。

A 高の学力層の高さに対する D 高の低さと、D 高第４期生予備層における「上級学校への進学」意欲の低さから、格差拡大の傾向を示す。格差拡大の動因が、単に学力上位層の動向のみならず、どの段階までの教育を将来受けたいかという教育期待（将来の教育達成）である学歴取得意識の差異も関連している。

表８　中３生希望高校別高校進学理由

人数（%）

高校	みんな進学	肩身が狭い	就職有利	友達や部活動	教養をつける	資格取得	上級学校進学	その他	合計
A 高	10(5.7)	6(3.4)	22(12.5)	35(19.9)	8(4.5)	17(9.7)	76(43.2)	2(1.1)	176(100.0)
B 高	5(3.9)	0(0.0)	18(14.2)	22(17.3)	7(5.5)	16(12.6)	56(44.1)	3(2.4)	127(100.0)
C 高	1(1.1)	6(6.5)	13(14.0)	19(20.4)	4(4.3)	10(10.8)	40(43.0)	0(0.0)	93(100.0)
D 高	0(0.0)	1(1.5)	16(23.5)	20(29.4)	3(4.4)	11(16.2)	15(22.1)	2(2.9)	68(100.0)
E 高	4(4.3)	3(3.3)	12(13.0)	23(25.0)	1(1.1)	6(6.5)	39(42.4)	4(4.3)	92(100.0)
合計	20(3.6)	16(2.9)	81(14.6)	119(21.4)	23(4.1)	60(10.8)	226(40.6)	11(2.0)	556(100.0)

注）期待度数５未満のセル16（40%）である。χ^2＝41.966, ρ＝.044

４．格差の背景－インプットにおける差異－

単独選抜入試による格差の動因が、学力上位層の動向と学歴取得意識の差異であったが、それでは、なぜ A 高へ学力上位層が流れ、D 高へ教育期待下位層が流れるのか。最上位 A 高と最下位 D 高の差異に着目しつつ、入学試験出願関連のインプットから格差の背景を探る。

出願関連の高校選択は、２つ（積極的、消極的）の理由に分けられる。つまり、学業成績を核に、選択の効用を活かせる者とそうでない者の差異である。前者は希望通り出願可能だが、後者は変更せざるを得ない。

2003年高１生調査において、中２生頃の希望高校（学科・コース）と入学後の高校（学科・コース）が異なる者を対象とした「志願変更理由」の各カテゴリーの規定力をみるため、各カテゴリー変数と「単独選抜制度評価」との一元配置の分散分析を試みた〔表９〕。F 検定の有意水準と、

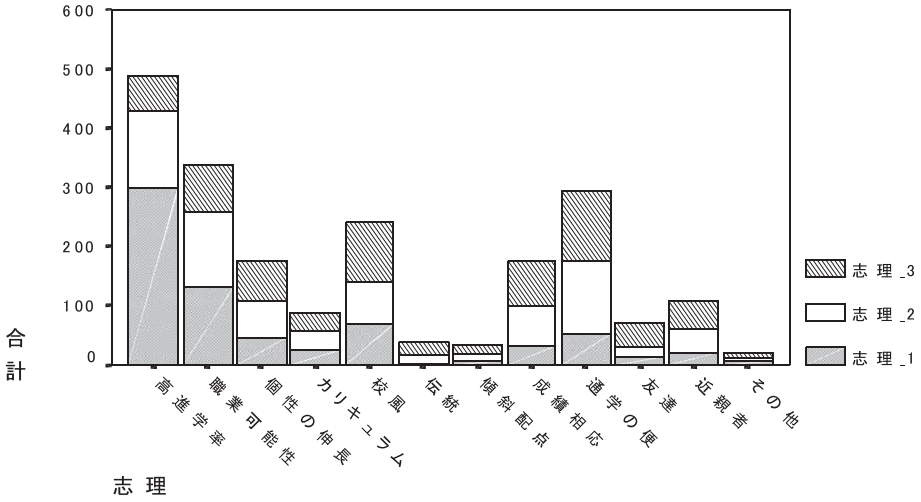
表９　志願変更の理由による単独選抜制度評価の一元配置の分散分析

独立変数	単独選抜制度評価		スコアー平均値	
	有意水準	相関比	いいえ	はい
成績上昇	.184			
成績下降	.007	0.036	0.54	－0.33
進学したい高校	.120			
進学したい学科・コース	.357			
友達と一緒	.269			
近親者が卒業生または在校生	.143			
先生の勧め	.472			
その他	.676			

影響の大きさや向きは明らかではないが、有意の際に必要な関係の強さを表す相関比を示す。「成績下降」が有意で、成績下降者は新制度を歓迎していない。数量化理論Ⅰ類の分析結果と同等の、すべてがダミー変数の重回帰分析（「その他」を除く変数減少法）でも同じ結果（ρ＝.007、β＝－.189）だった。成績下降で希望高校への入学可能性を低減させ、模擬試験などの事前選抜の作用で志望校変更に連動するため、新制度の不評につながる。

さて、出願時にも、希望通りの者と変更者では、「志願理由」に差異がみられるはずである。入学高校（学科・コース）の「志願理由」を、最も当てはまるものを１として、３つまで順序づけてもらった〔図１〕。「高い進学率」（23.6%）と「希望職業可能性」（16.3%）は旧総合選抜校の進学校としての存在を裏づけ、「通学の便」（14.2%）は旧制度との関連を示す。むしろ問題は上位３つ以外の志願理由で、「校風が好き」（11.6%）は高校人気度＝格差の指標となりうる(7)。

図１　入学高校（学科・コース）の志願理由



また、３つまで可能な「志願理由」の選択者数とその高校全体に占める比率から、統計的有意差（ρ＝.000、χ^2＝192.193）がみられたことから、高校の特徴把握のために調整済み残差〔表10〕を求めた。調整済み残差は、平均０、標準偏差１の正規分布に近似的に従う性質から、2.0以上のものは特徴的な理由とみなしてよい。Ａ高は「校風が好き」「個性の伸長」「通学の便」、特に「校風が好き」の高さは相当なものである。Ｄ高は「傾斜配点入試」「友達と一緒」「成績相応」、特に「傾斜配点入試」が高いのは、2003年度入学試験における純粋な普通科のみのＣ・Ｄ・Ｅ３高校の中で多様な傾斜配点方式だったからである。２年目以降は各高校で導入されたため、特徴の相対的低下が推察される。Ａ高とＤ高は、生徒の質で差異の可能性がある。

表10　志願理由の調整済み残差

	Ａ高	Ｂ高	Ｃ高	Ｄ高	Ｅ高
高い進学率	−3.9	1.7	1.8	.1	1.0
希望職業可能性	.3	2.3	−1.2	−1.6	.0
個性の伸長	3.0	−2.1	−2.2	−1.2	2.2
カリキュラム	− .2	.9	− .1	− .1	− .6
校風が好き	6.9	−2.9	−2.1	−3.2	.3
伝統	− .1	−3.0	.4	− .2	3.3
傾斜配点入試	1.2	−1.6	−1.8	4.8	−2.6
成績相応	−3.2	− .5	1.8	2.4	.2
通学の便	2.1	.2	− .3	.2	−2.6
友達と一緒	−4.5	1.2	3.1	3.1	−2.1
近親者が卒業生または在校生	−2.1	.8	.5	.3	.7
その他	−1.3	.8	.9	− .2	− .1

さらに、「志願理由」の各カテゴリーの規定力をみるため、各カテゴリー変数と「単独選抜制度評価」との一元配置の分散分析を試みた〔表11〕。「高い進学率」「個性の伸長」「校風が好き」「友達と一緒」が有意である。「個性の伸長」「校風が好き」は新制度歓迎傾向だが、「高い進学率」「友達と一緒」は逆である。数量化理論Ⅰ類の分析結果と同等の、すべてがダミー変数の重回帰分析（「その他」を除くステップワイズ法）でも、「高い進学率」を除いて、同じ結果（「個性の伸長」＜ρ＝.002、β＝.117＞、「校風が好き」＜ρ＝.004、β＝.107＞、「友達と一緒」＜ρ＝.006、β＝－.103＞）だった。それゆえ、A 高と D 高は、生徒の質で差異の可能性が高い。

表11　志願理由による単独選抜制度評価の一元配置の分散分析

独立変数	単独選抜制度評価		スコアー平均値	
	有意水準	相関比	いいえ	はい
高い進学率	.021	0.008	0.67	0.45
希望職業可能性	.072			
個性の伸長	.000	0.017	0.43	0.79
カリキュラム	.271			
校風が好き	.001	0.016	0.42	0.72
伝統	.697			
傾斜配点入試	.129			
成績相応	.052			
通学の便	.173			
友達と一緒	.000	0.017	0.57	0.06
近親者と同じ	.613			
その他	.059			

以上から、「個性の伸長」「校風が好き」の選択者は新制度への＜適応群＞、「成績下降」「友達と一緒」の選択者は＜不適応群＞とみなせる。高校選択の基準が、＜適応群＞は自己にあるのに対し、＜不適応群＞は志願変更者で，友達という他者との関係性にある。＜適応群＞の要件を満たす A 高に自律的な学力上位層が流れ、＜不適応群＞の要件を満たす D 高に他律的な学力低位層が流れる。

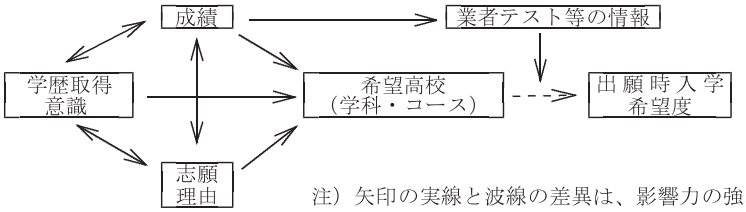
結語

本稿は、長崎地区のタイプ・ランクにおいて優位な位置を占めていた総合選抜校（公立普通科の進学校）の間に格差は認知されていなかったが、単独選抜制度の導入によって格差が発生したのかを問題とし、特に新制度による合格実績が明白ではない第４期生までのインプットにおける格差形成に着目した。格差は新制度への移行期より兆候がみられ、新制度によって明白となった。単独選抜という自由競争下では格差が発生することが立証されたと同時に、総合選抜制度自体が制度内矛盾を抱えつつ限界を克服してきたことも示した。

新制度による格差の要因を、A 高と D 高の差異に着目し、動因と背景（入学試験出願関連）における差異から分析してきた総括は、次のように図式化されよう。インプットのメカニズム〔図２〕では、新制度のインプットにおける格差形成のメカニズムを示している。新制度による合格実績が明白ではない段階では、中学生の高校選択の主たる要因である学業成績、学歴取得意識と志願理由（校風や個性の伸長）が密接に連結することで、希望高校（学科・コース）が目指される。だが、上級学校への進学を希望している学力上位層の希望高校（学科・コース）に規定された、出願前の流動的な傾斜的選抜システムのメカニズム作動のため、「成績下降」や「友達

と一緒」の志願理由に規定された学力下位層の希望は抑圧され、出願前後による意識の差異が発生して、希望時と出願時の入学希望度とは必ずしも一致しない。５期生以降の格差形成のメカニズムでは、アウトプット公開後、すなわち高校のプレステージに応じて、傾斜的選抜システムのメカニズムが作用して、少なくともＥ中生が高校卒業する2010年までは、格差化が固定化し拡大再生産（序列化）の傾向を示すことになろう。

図２　インプットのメカニズム



注）矢印の実線と波線の差異は、影響力の強弱を相対的に示したもの。

格差形成は、上級学校への進学を目的とする学力上位層が牽引力となり、志願理由（校風や個性の伸長）を拠り所として高校選択したことによる。校風や個性の伸長という学校文化は、中学生のイメージによる期待や魅力(象徴的価値)のみならず、入学後の高校生に実感されることが、高い合格実績（機能的価値）の要件となる。特に、Ａ高に顕著な特徴である「校風が好き」の牽引力が格差化の最も有力な要因であったことから、Ａ高の校風は単独選抜制度により価値を得たのである。

制度移行による格差形成の契機は、学校文化が傾斜的選抜システムをもたらすことで成立し、その満足度が高いと、インプット（単独選抜入試）→スループット（学校文化）→アウトプット（合格実績）→インプット（層別入試）という拡大再生産（序列化）が確立する。生徒急減による高校再編化の荒波の中で存立し続けるためには、高校が生徒にとって魅力ある学校として、他校とは異なる特色（差異化）を出すことが要請される。その意味において、合格実績という差異化以外にも価値を認めるような、特色ある学校づくりという高校多様化の趨勢は、時代に適っている。

［注］

（１）総合選抜制度とは、単独選抜制度以外のことを実態に即して呼んでおり、合同選抜制度、学校群制度や複合選抜制度などを含んでいる。

（２）中央教育審議会による「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」の答申の主な内容は、「小・中・高一貫教育課程」、「能力・適性に応じた多様なコース化」や「生涯教育体制の確立」などであった。

（３）Ｅ高が2004年併設型中高一貫校となり、Ｅ中生の高校卒業後は変動が予想されるが、その間に変化がなければ、高校間格差は初年度の傾向が拡大再生産されるとの研究成果（橋爪1976a）に従うことになろう。

（４）2003年７～８月の調査は、旧総合選抜校１年生と公立中学校・学習塾の教員を、2005年６～７月の調査は、中３生と旧総合選抜校３年生を対象とした。

（５）既存研究では、総合選抜制度に平準化の効果を認めつつも、各教育委員会の実際的適用が異なるため、制度適用による形態変化が新たな格差形成をもたらすと指摘されてきたが、長崎県においては、「新設校を伝統校との学校群を組むことで……進学面はもとより文化・スポーツ面においても実績を残してきた」（長崎

県教育委員会2001, p. 22）との認識であった。

（６）実際の出願による競争率は、合格可能性を念頭に置いて生徒が現実的に対応した結果なので、むしろ調査６～７月時点の希望の方が、高校人気度を測るバロメーターに相応しい。

（７）「校風が好き」の比率を高校別にみると、Ａ・Ｅ高が平均値より高い。両校は歴史のある兄弟校であるが、「伝統」との関連は無相関（ρ=.058, r=.071）であった。橋爪（1959）は、校差観の内容として、伝統・校風、生徒の成績、進学率を主要因に挙げていたが、伝統と校風を一括りにできなかった。

校風選択の高校別比率

高校	カテゴリー選択総数	校風選択数	比率（%）
Ａ高	581	112	19.3
Ｂ高	465	36	7.7
Ｃ高	360	30	8.3
Ｄ高	338	22	6.5
Ｅ高	332	40	12.0
合計	2076	240	11.6

［文献］

秋元照夫　1957,「高校進学における学校選択と学校差について」『名古屋大学教育学部紀要』第３号。

橋爪貞雄　1959,「中学生の学校差観」『教育社会学研究』第14集，東洋館出版社。

―――　1976a,「学校群における格差形成のメカニズム」『教育社会学研究』第31集，東洋館出版社。

―――　1976b,「学歴志向体制下の中学校進路指導」橋爪貞雄編『学歴偏重とその功罪』第一法規出版。

秦政春　1995,「階層社会の中の学校」麻生誠・小林文人・松本良夫編『学校の社会学』学文社。

樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編著　2000,『高校生文化と進路選択の変容』学事出版。

堀尾輝久・久富善之編著　1996,『講座学校６　学校文化という磁場』柏書房。

育伸社入試情報センター　2003,『SUCCESS - LIFE2004　全国公立』。

――――――――2005,『SUCCESS - LIFE2006　全国公立』。

――――――――2006,『SUCCESS - LIFE2007　全国公立』。

岩木秀夫　1977,「総合選抜制度の教育効果－学力水準との関連で－」『教育社会学研究』第32集，東洋館出版社。

岩木秀夫・耳塚寛明編著　1983,『現代のエスプリ　高校生』195, 至文堂。

苅谷剛彦　1986,「閉ざされた将来像」『教育社会学研究』第41集，東洋館出版社。

国民教育研究所　1988,『高校入試制度の改革』労働旬報社。

教育開発出版高校入試問題研究会　2004,『高校入試編2005年度入試用　進学への道標　西日本版』。

――――――――――――2007,『高校入試編2008年度入試用　進学への道標　西日本版』。

松森武嗣　2003,『単独選抜高校入試制度に関する調査結果－長崎地区－』三恵社。

―――　2006a,『中学生の進路と生活および高校生の学校生活に関する調査結果－長崎地区－』佐伯印刷。

―――　2006b,「高校入試制度改革の影響力－受験生を中心に－」『別府大学紀要』第47号。

耳塚寛明　1982,「学校組織と生徒文化・進路形成」『教育社会学研究』第37集，東洋館出版社。

―――　2000,「進路選択の構造と変容」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編『高校生文化と進路選択の変容』学事出版。

長崎県教育委員会　1994,『平成７年度長崎県公立高等学校入学者選抜実施要領』。

――――――1999,『平成12年度長崎県公立高等学校入学者選抜実施要領』。

――――――2001,『長崎県立高等学校改革基本方針』。

長崎県教育会　1976,『長崎県教育史』，長崎県教育委員会。

中西祐子・中村高康・大内裕和　1997,「戦後日本の高校間格差成立過程と社会階層」『教育社会学研究』第60集，東洋館出版社。

尾嶋史章　2001,『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房。

篠原清昭編著　2002,『総合選抜制度解体の研究－高校入試制度と平等の崩壊－』九州大学大学院教育学部門・教育法制研究室。

潮木守一　1975,「進路決定過程のパス解析－高校進学過程の要因分析－」『教育社会学研究』第30集，東洋館出版社。

竹内洋　1996,『日本のメリトクラシー』東大出版会。

田村栄一郎　1959,「公教育制度と学校差」『教育社会学研究』第14集，東洋館出版社。

Waller,Willard W. , 1932, The Sociology of Teaching,Wiley, （＝1957, 石山脩平・橋爪貞雄訳『学校集団』明治図書出版）.

ABSTRACT
The factors of the gap between the old Sogo-Senbatsu high schools by the switchover to the Tandoku-Senbatsu system

Taketsugu MATSUMORI

The main stream of the existent researches on the gap between high schools has explained the selection function included in the systematic structure which the school class such as the general course, the business course, the industrial course and the agricultural course fulfilled a distributive function as a tracking system which regulates future courses, and it has been pointed out that a record principle and an income principle or the society class worked in those processes. It has been inspected under the Sogo-Senbatsu system at the same time how the ideology of the equal opportunity in the education were realized.

After I based on the knowledge of the above researches, I focus on the gap between the old Sogo-Senbatsu high schools due to the switchover to the Tandoku-Senbatsu system by this paper. It is for the Sogo-Senbatsu high schools of the public general course which have high rate of students receiving higher education to advanced schools occupied a predominant position in the school class of Nagasaki area. In other words, I am inquiring into the elucidation of the problem of where the gap is seen between the Sogo-Senbatsu high schools where it was a principle that there was no gap due to the switchover to the Tandoku-Senbatsu system, and if it is seen, the problem of where that gap has been brought by what kind of factor between the old Sogo-Senbatsu high schools.

As a result of the analysis, in the place of the theoretical premise that the trend of the highschool choice by the high-ranking students in the scholarship promotes the gap between the high schools, the expectation and the charm, namely "the expansion of the personality "and " the school character " that the high-ranking students in the scholarship entertain for the high school had important meanings for the formation of the gap. The school culture which brings about not only junior high school students ' images but also actual feelings of high school students was connected with the expectation and the charm (symbolic value) for the originality of the high school together with the higher evaluation (functional value) by the actual results of entering to advanced schools.

The opportunity for the formation of the gap between the old Sogo-Senbatsu high schools by the switchover to the Tandoku-Senbatsu system from the Sogo-Senbatsu system is realized by school cultere ' s bringing about the selection system of each layer in the scholarship. And when the gap of feelings of satisfaction in school cultere becomes continuous, the expanded reproduction, namely input (the entrance examination of each layer in the scholarship) →throughput (the school culture) →output (the actual results of entering to advanced schools) →input (the entrance examination of each layer in the scholarship), is realized.